

## 「主宰の言葉より」―現場に立つ―

今瀬 一博

五年前の「対岸創刊三十五周年記念号」に、「三十五周年を迎えて」と題する、剛一主宰の「巻頭言」が載りました。その冒頭で主宰は、「今までは決して後を振り返るまい、前をだけ見つめて進めば必ず開けるはずだと自分や仲間にも言い聞かせてきました。しかし三十五周年ともなれば振り返ることも許されるのではないかと思えます。いや振り返らなければならないのではないかと思えます。」と述べ、創刊を決意した理由に続き二人の師として創刊に尽力してくれた多くの仲間への感謝の気持ちを綴ります。「振り返らなければならない」と言う大きな理由です。

その後には「対岸」創刊号の「創刊の言葉」を引いて「私は創刊号で『俳句は自然と人間の関わりの中にある』と言いました。『感動こそが人の生きる証である』とも言っています。この考えはまだ微動だもしません」と述べます。そして文末は「心を引き締め、確実に四十周年へスタートを切りましょう。」という呼びかけの言葉で締め括りました。三十五周年から四十周年までの期間、これまでの「総括」と今後の「方向性」を示す大切な期間だから気を引き締めていきましょうという、メッセージです。今回は四十周年の年に当たり、これまで剛一主宰が折に触れて述べてきた俳句の心得について振り返りながら、今後の「対岸」の目指

す方向性について、例句を紹介しながら述べてみます。

第一回目の今回のテーマは「現場に立つ」を選びました。先程確認した二つの「創刊の言葉」の一つ目、「俳句は自然と人間の関わりの中にある」の「自然と人間」という部分は、山口青邨の風土詠と能村登四郎の人間詠に学んだ主宰の経歴から考えれば自然に出た言葉と思えますが、四十周年に当たり再確認すべきはその下の「関わり」という言葉です。そして関わる際に大事なのが、「創刊の言葉」の二つ目に挙げた「感動こそが人の生きる証」ということと思えます。そして「感動の気持ちを以て相手と関わる」のに最も有効で現実方法が、「現場に立つ」ということです。この場合の「現場」とは、出かけた吟行先のような現場だけを指すのではなく、「感動の生じた現場」ということです。主宰のよくお話になる、「対象を愛しなさい」とか「俳句は直感である」等も「現場」にいななければ不可能です。同じく主宰がよく口にされる「九九%馬鹿になる」、「%の真実を詠む」も、対象と交わる「現場」にいるからこそ可能です。「対岸創刊三十周年記念号」の特集の時は、多くの対岸人が異口同音に、印象に残った主宰の言葉としてこれらを挙げました。四十周年目の「総括」とは、これらの言葉を実感をもって捉えることであり、更に作品を以て具体化することで、今後の「方向性」も明確にすることができます。ところで今挙げた言葉以外にも、「対岸創刊三十周年記念号」の「剛一語録」心に残る主宰の一言には、同人・会員から寄せられた印象に残っている主宰の言葉が数多く掲載されます。試みにいくつか挙げてみても、「作者がいる」、「実感がある」、「嘘がない」、

「有るものを詠んでいる」、「情景が見える」、「今を詠む」、「無心になること」等々、実に様々な言葉が載ります。そして紹介したこれらの言葉はいずれも「現場に立つ」ことで可能になるものばかりで、「対岸」のスローガンでもある「自分の感動を自分の言葉で」もその延長線上に置くことができます。

ではここで実際に例句を用いて、対岸人の皆さんの印象に残った主宰の言葉と「現場に立つ」こととの関連を見てみましょう。今年の「対岸」の新年会でも紹介した、茨城県土浦市の寺に残る同じ「力石」を詠んだ作品です。

- ① 力石しつとり濡らし花の雨 岡崎 桂子
- ② 秋風や持ち上げてこそ力石 成井 侃
- ③ 力石丸く秋風流しけり 福田 信子

この三句は詠まれた季節の違いや作者の受けた感動が異なるので、当然作品の趣は全く違います。しかし三句とも、「力石」の置かれた現場に立っています。①の句は、「無心になること」で目の前の「今を詠む」ことに徹しています。だから「実感がある」し、「嘘がない」句となり、「情景が見える」のです。②の句は目の前に「有るものを詠んでいる」句で、「力石」以外には何もありません。しかし対象には深く入り込んでいます。「無心になること」で作者の心の中に湧き上がってきたのが「持ち上げてこそ力石」という感慨です。まさに今の偽りのない「作者がいる」作品と言えます。③も②と同様に秋風の中の「力石」を詠みますが、しつかりと見つめて、「有るものを詠んでいる」作品です。その結果出てきた表現だから見えないはずの「秋風」まで丸く見える石の形が浮かぶ、「情景が見える」句となったのです。

ところで四十年前の創刊号の主宰作品は、当然このような姿

勢で貫かれています。そして、「現場に立つ」ことを実践しつつ、創刊の理念である、「俳句は自然と人間の関わりの中にある」と、「感動こそが人の生きる証である」を作品を通して実践します。

わが前にばかり道あり芒原

創刊号出てびつしりと柚子の色

花野行く歩幅を生きる歩幅とす

「芒原」、「柚子」、「花野」。どの言葉も、作者の周りにある自然です。そしてどの句もその自然との「関わり」を通して、強い感動を詠んでいます。「芒原」の中には一本の道が通っています。仮に心象だったとしても強い実感があり、感動が心象を実感の域にまで高めています。それはこの句で詠んでいるのが傍観の「芒原」でなく、進んでいく「芒原」だからでしょう。言うまでもなく芭蕉の「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」は心象句ですが、強い実感があります。「旅に病んで」という現実と、「かけめぐる」の現実感が生んだ実感です。「柚子」の句もそうです。「びつしり」は柚子を讃えた言葉であり、喜びや感謝の言葉でもあるでしょう。この対象との、近さを越えた一体感が、先に挙げた「作者がいる」ということであり「実感がある」ということであり、「今を詠む」ということです。会員各位に示した言葉を身をもって実践しています。「花野」の句の「花野」は、言葉自体がとても美しい。華やかな秋を代表する季語の一つでしょう。しかしこの「花野」も、「行く」ためのものであり、外から見ているものではありません。自分の「歩幅」をもって踏んでいくものです。この、対象との一体感が、この句から感じる強い実感の裏にあるのです。いずれも、創刊の言葉、「俳句は自然と人間の関わりの中にある」、「感動こそが人の生きる証である」が、作品の中に見事に息づいています。